

# 第一章 セルジオ・デメロの「国づくり」<sup>(注18)</sup> の軌跡をみる

医者からは無茶だ（！）と言われた東ティモールへの赴任にあたって、熱帯地域特有の蚊が媒介する感染症にはくれぐれも気をつけるようにと強い警告を受けた。居住環境が劣悪な首都ディリに着任してほぼ二週間が過ぎ、赴任直後に組まれた日程もほぼこなし、当初の精神的な緊張感がいくぶんか和らいてきたのを自分でも自覚していた。そんななか、仮住まいのホテルの自室で蚊に刺されて目が覚め、刺された個所が脹れているのを確認したら、妙に神経質になって眠られず、そのまま夜を明かした。これまでに二名の館員がデング熱で倒れている。

今回のように、まったくと言っていいほど予備知識を欠いたままの赴任は、初めてのことであり、健康上の不安を抱えていたために、正直不安もあった。しかし、携帯電話で東京と直接話が出来、何とかインターネットがつながり、またNHKのテレビ番組も視聴できるのは、世界的に広がった高度情報化の恩恵であり、ここでも例外でないのはありがたい。バグダッドの国連事務所が自爆テロに襲われて、デメロ特別代表他の国連職員が死傷したというニュースが、スイッチを入れたテレビから突然流れてきたのは、そんな時だった。

## 国連がつくった国

「(第二次世界大戦)戦後は終わった」といわれるなかで、それを覚えている日本人にとって「基地のまち」という言葉には独特の語感がある。首都ディリはまさに「国連のまち」というのがこの国に対する私の第一印象である。

空港に到着し、エプロンに駐機中の濃緑色に塗装されたC-130型輸送機のひととき大きな日の丸が目に入ってきた時、いよいよ着いたかという実感と同時に奇妙な安堵感が沸いてきた。実は、この時目に焼きついた日の丸の大きさは、国連が取り組むこの国の国づくり支援の中で日本が果たしている役割の大きさそのものであり、また、私が感じた安堵感は、この国の国民自身が日本に対して感じている期待感と信頼感でもあると、その後気づくことになる。因みに、このC-130型機は、当地で活動中の、兵庫県

の伊丹からきた第三次陸上自衛隊施設部隊への補給のために、たまたま日本から飛来したところで、数時間の滞在のあと帰途についた由である。

市内に入ると、ライトブルー（淡青色）の国連旗を掲げた施設が各所に見受けられ、UNマークの車輛といたるところで、すれ違う。軍事、文民警察、民政部門の三部門から成るUNMISSETの総勢約5000名が総人口80万人（注19）ほどのこの国全土に展開しているが、本部機能の集中する首都デシリにおける国連のプレゼンスは過剰に大きい。したがって、国際色も豊かである。そのなかに、522名の自衛隊員を含む600名強の日本人と一緒にあって国づくり支援のために、文字通り、汗を流している。

### 「時代の寵児」デメロの軌跡

セルジオ・ヴィエイラ・デメロ（Sergio Vieira de Mello）は、一年三ヶ月前まで、UNMISSETの前身であるUNTAET（United Nations Transitional Administration in East Timor: 国連東ティモール暫定行政機構）の事務総長特別代表として、独立の準備段階に入った東ティモールに二年半の間「君臨」した。その間に彼は、カンボジアの国家再建のために設立された、明石康氏の率いるUNTAC（United Nations Transitional Authority in Cambodia: 国連カンボジア暫定統治機構）で難民支援を担当し、その後もボスニア、ルワンダと現場での活動が続く。その彼に転機が訪れ、「政治の表舞台」に踊り出るのは、親友のコフィ・アナンが1997年に国連事務総長に就任してからであろう。極めて短期間ながら、デメロは紛争が止んだコソボの復興のために、軍事を担当するNATOと役割分担して、民政、人道支援、文民警察などの分野を統合した国連による支援体制づくり、即ち、UNMIK（United Nations Interim Administration Mission in Kosovo: 国連コソボ暫定行政ミッション）の陣頭指揮をとる。このUNMIKが、東ティモールで展開されるUNMISSETを国連が構想する際のモデルになる。

私は、1980年代半ばにジュネーヴに勤務して、代表部で人権、難民などの人道問題を担当したが、国連難民高等弁務官事務所（United Nations High Commissioner for Refugees: UNHCR）で彼が難民の支援活動の部局にいたのを微かに覚えている。その時、官房にいたのがアナンであり、彼らの個人的なつながりはこの時期にまで遡る。「動」のデメロと「静」

のアナンのふたりの間には相互に補うものがある。

考えてみれば、デメロは冷戦終了後に国連が直面することとなる紛争被災国に対する復興支援、国づくりの重要性が高まる中で、国連職員のなかから誕生した“時代の寵児”である。『ニューヨーク・タイムズ』紙は、彼の死を追悼する社説のなかでその業績に触れて、当初東ティモールでは権威主義的な手法によって国づくりに臨んで失敗したデメロは、現地人に権限を委譲することで成功を収めたあと、これを教訓としてイラクで実践しようとした矢先であったと論評している(注20)。彼の足跡を東ティモールで振り返ると、その持ち味は彼が得意とする人道問題、人権擁護に篤い国づくりである。これは現在国連がもつ潜在的な強みでもあり、また、同時に限界でもある。

## 追悼式

彼の死が報道されると、ディリの政府庁舎と国連関係施設には半旗が一斉に掲げられ、人々はその死を悼んだ。8月20日夜には政府庁舎前広場の一角に臨時に据えられた彼の遺影と祭壇の前には人々が自発的に集まり、ミサが執り行われたという。翌朝そこに残された多くの蠟燭の跡をみて、私はこの国の国づくりにおける彼の存在の大きさを改めて痛感した。22日夕刻には当国首脳が一堂に出席してUNMISET主催の追悼式が開かれたが、その直前に、政府側によるスケジュールの調整の結果、わが国の緊急無償援助で完成したプロジェクトの引渡し式が当初の予定通りに举行された。挨拶に立ったアルカティリ首相 (Mari Alkatiri) によれば、ディリ市人口約15万人の80%を対象に上水道を整備するこの計画は、UNTAET時代にデメロが青写真を描いたものであり、総工費11百万ドルはこの国の年間総予算の14%にも相当するたいへんな金額だという。

追悼式では彼に対する思い出が関係者の口からそれぞれに語られた。独立二年目となる来年 (2004) の記念式典には、再度東ティモールの土を踏むことになっていたようである。また、彼の業績を記念して政府庁舎の近くの通りが「セルジオ・デメロ通り」に改名されるとも聞くが、再び足を踏み入れることのないこの国で、彼の想いがいろいろな形で引き継がれていく。

18. サイモン・チェスターマンは、nation-building、peace-building、state-buildingの間の意味及びニュアンスの相違について説明している。以下を参照ありたい。Simon Chesterman, *You, The People: The United Nations, Transitional Administration and State-Building*, Oxford.  
2001年2月、国連総会は、国連システム内でpeace-buildingといわれる範疇の活動が増大するのに鑑みて右を定義した。  
(S/PRST/2001/5)
19. 2005年に国連人口基金が行った国勢調査の結果では、総人口は94万人。
20. “Nation Builder Slain,” *New York Times*, 20 August 2003